江戸末期のウイルスとの闘い

新型コロナ感染症が五類になって、今年の後半から同窓会も再開されるようになってきた。新春には、郷里での同窓会に久々に参加しようと思っている。

古来、疫病死因の第一位は天然痘であった。江戸期の古文書を見ると、郷里の佐賀では、この疫病との闘いを早くから積極的実施している。佐賀大学蔵小城鍋島文庫『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋学史料』(後編)には次の様に書かれている。(以下、引用)

古代からの慢性的な流行病で、江戸時代の死因一位が疱瘡(天然痘)であった。小城藩(佐賀支藩)領内でも、天保三年二月三日には、福智院で五穀豊穣、疱瘡軽安祈祷が行われているが、同年四月二三日には、田尻種一郎娘が昨夜疱瘡にて死去したと記録されている。この年、同地に疱瘡が流行していた。そのため九月五日には祇園社において、領内疱瘡転除の祈祷願が出されている。また、天保七年二月二四日記事には鹿島家娘御季が疱瘡に罹ったとの知らせが載っている。本史料は小城藩の公的記録であるので疱瘡罹患者記事は上級家臣らに限られるとしても、疱瘡は庶民だけでなく領主層も罹患を免れない恐ろしい病気だった。(中略)

慶応二年二月一六日には、二月から三月の小城藩領での引痘日程や手伝医師名が決まった。引痘日は二〇日、二六日、三月三日、同九日、同一五日で、引痘方手助は村田道碩、相良柳沢、菊地宗垣、原口養和、中嶋需安が命ぜられた。二月二〇日の引痘日には、佐賀から村上俊庵、二六日には宮田魯斎、三月三日は渋谷良次、三月九日は相良寛斎、三月一五日には、松隈元甫が、無量寺へ出張してきて、種痘実施を指導した。

無量軒庵寺跡（海士町）

以後も三月二一日、佐賀藩医高木玄洞、三月二七日に大中春良、四月三日、渋谷良次が小城無量寺へ出張して、種痘を実施した。このように佐賀藩引痘方医師が私領へ出張し、私領医師らの手伝いを得て種痘を実施する体制が好生館を中心として確立していった。

種痘の実施（原文抜粋）

慶応二年三月二十七日、四月三日引痘に付、佐嘉医師出張の事

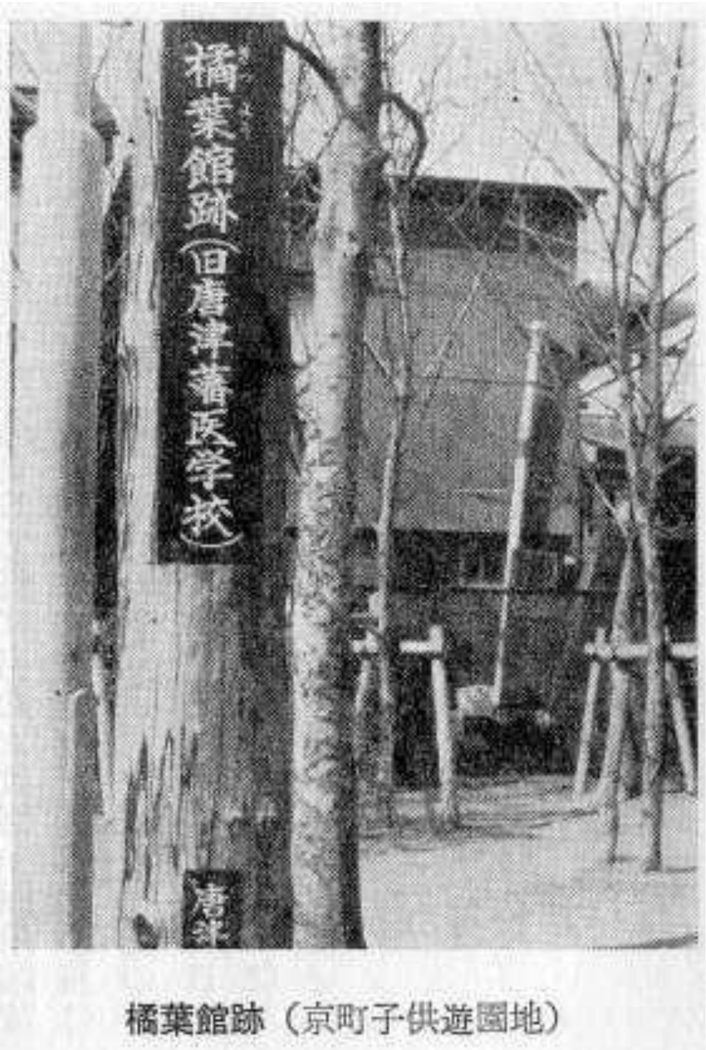
一　引痘方二付而、佐嘉医師大中春良 今日無量寺出席相成候段
　　会所より達出相成四月三日

一　佐嘉医師渋谷良次、今三日無量寺出席相成候段、引痘方より
　　達出相成候

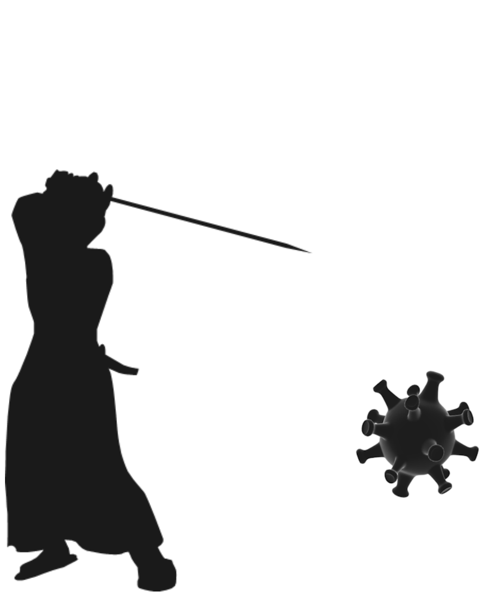
（引用、終わり。写真は筆者挿入）

筆者の家廟に係わる箇所を抜粋したのだが、当時も感染症対策に頑張っていたのだ。佐賀医学史研究会報 110号（2018/02/03）には、「大中玄哲は、嘉永二年七月十日に緒方洪庵の大坂適塾に入塾し、唐津で開業していたらしく、明治四年、唐津藩の学制改革で耐恒寮に英学者高橋是清を招いたとき、医学寮の教師大中春良として就任している。」とあるので、若い頃の名前は「玄哲」、後に「春良」と改めている。長崎の鳴滝塾で、シーボルトからオランダ医学を学んだ、先人の伊東玄朴先生もあり、「玄」も「春」も医者の特徴的な名前なのだろう。

因みに、前出の会報にある、唐津藩医学寮は「橘葉館」（唐津市京町札の辻）と言い、明治四年四月二十九日に、蘭方医であった大中春良が迎えられている。明治四年の唐津藩には漢学部の志道舘と医学部の橘葉館、英学校の耐恒寮があったわけである。



橘葉館跡（京町子供遊園地）



令和五年十二月十八日

大中臣正比呂　記